

これまでの日中の「謝罪」表現研究の 問題点と今後の課題

日本語科 専任教授 高橋優子

(2011.9.1 受)

要 旨

日中両国の謝罪行為に関しては、それぞれ特徴があり、日中の文化摩擦の原因になっているとも言われている。本稿では、日中の「謝罪」の表現研究に関する先行研究を調査し、今後、日中の謝罪表現研究を行うにあたり、どのような点に留意していく必要があるか探ってみた。

<キーワード> 日中 謝罪 对不起 すみません 定型表現 ステレオタイプ
多義性 方略 異文化コミュニケーション 面子 face

1. はじめに
2. 「すみません」と「对不起」の比較
3. 日本語と欧米語の「謝罪」の対照研究
4. 日本語と中国語の「謝罪」の対照研究
5. 問題の所在
6. 今後の課題

注

参考文献

1. はじめに

日本における中国人論では、「中国人は自分の非を認めず、『对不起（すみません）』と言わない」というステレオタイプがあり（末田 1993, 晨 1995, 陸 2001）、これは日中の文化摩擦の原因になっているとも言われている。一方、日本人は「決

まり文句的、慣用的な意味で使用する場合も含め、すぐに『すみません』と言う』とされている（金田一1987, 池田1993, 中道・土井1993, 晨1995）。

この両国の謝罪行為に関する理由付けとして、中国側は文化大革命により秩序が乱れたこと、社会主義的市場経済が未成熟な段階にあること、謝罪することが自我の喪失に繋がると思われていること、面子^{#1}との関係などが挙げられている。日本側の理由としては、「すみません」という直接的発話行為が、日本語の謝罪行為の代表的なシナリオであること、謝ることが奨励され、潔さを好み、言い訳は恥ずべきものという意識があること、人間関係を重視し、お互いの関係を確認し、秩序立てておいてからでないと話が始まらないような精神性を日本人が持っていることなどが挙げられている。

2. 「すみません」と「对不起」の比較

日本の代表的な辞典^{#2}の「すみません」の項目では、「相手に謝罪・感謝・依頼などをするとき用いる」という解釈が、中国の代表的な辞典^{#3}の「对不起」の項目では、「人に対して恥じるところがある。常に遺憾の意を表するための決まり文句として用いる（筆者訳）^{#4}」という解釈が挙げられていた。これまでの先行研究では、日本語の「すみません」には「謝罪」に加えて「感謝」や「依頼」など、さまざまな意味が含まれている（山梨1986, 中田1989, 沖1993, 三宅1994, Ide 1998）とする「多義性」が指摘されている。この理由付けとしては、日本語の謝罪表現である「すみません」が日本人にとっての「補償のあいさつ（金田一1987, p.75）」になっているという分析がある。しかし、中国語の「对不起」には「謝罪」の意味以外は含まれないことを異文化コミュニケーションの観点から曹（2002）が指摘している。日本語で「すみません」が用いられる、謝罪、感謝、呼び掛け、話の切り出しなどに関して、中国語では一般に、謝罪には「对不起」、感謝には「谢谢」、呼びかけには「小姐」や相手の個人名、話の切り出しでは相手の個人名、又は役職名を用いる。陸（2001）は、中国で日本人学生が遠くに立っている中国人の店員に向かって、呼びかけのつもりで「对不起、对不起」と叫んだが誰一人として振り向かなかつたことを報告している。

3. 日本語と欧米語の「謝罪」の対照研究

謝罪という発話行為に関しては、これまでもさまざまな研究がなされてきた。中間言語語用論での謝罪に関する対照研究では Olshtain (1983)がある。中田 (1989) は、発話行為理論の立場から、日本語と英語における陳謝⁴⁵と感謝のあり方に関して英語話者との相違点を挙げている。池田 (1993, p.13) は、謝罪を社会の成員であれば誰もが持っている face (“public self-image” Brown & Levinson (1987, p.61)) の問題と捉え、「修復行動」(“remedial work” Goffman (1971, p.108)) の一つであると定義している。そして face の視点から日米の謝罪の方略を調査し、米国との比較により、日本人は米国人に比べて、単独で謝罪表明を使うことが多く、謝る事柄が重大なほど方略の数が増える傾向は日本人より米国人の場合で顕著のようであると結論付けている。又、低姿勢でひたすら謝る形をとる日本人の謝罪は、一見不誠実な謝罪のように思えるが、タテ構造の日本の文化社会において、相手に認められ受け入れられることを重視する日本人の face を考慮に入れば、日本人の謝罪は、人間関係重視型であり、人間関係の潤滑油として相手との調和を保つことを基本的機能としているとすることができる。平賀 (1996) は日、英、仏、独語における謝罪の方略に関する考察を行った。謝罪行為において、日本語では定型表現による直接的発話行為、責任の所在及び相手への気配りの言及、の三つの方略が、欧語では直接的な発話行為及び責任の所在についての言及が用いられる傾向があるという結論が導かれていた。

以上が日本語と欧米語の謝罪に関する先行研究であるが、これらの研究は欧米系の言語との対照により日本語の謝罪の方略の特徴を明らかにしようとするものであり、東洋系言語との対照ではなかった。本稿は日本語と中国語の対照研究の方向性を探ろうとするものであるが、対照する言語の系統が変わり、基準軸がずれば当然結果が異なってくることが予想できる。

4. 日本語と中国語の「謝罪」の対照研究

日中の文化比較研究に関しては、面子との関係性に着目したもの (末田 1993, 1997)、異文化コミュニケーションの視点から論じたもの (山口 2001)、「報」と「恩」という文化的概念から論じたもの (晨 1995) などがあり、謝罪行為に関す

る研究は以下に挙げる2本があった。

笹川は、空欄のディスコースを完成する記述形式による調査を実施し、日本語と中国語以外に7ヶ国語を含めた9言語を比較して異文化間に見られる「丁寧さのルール」を比較している。全体的な傾向を見ると、他言語と比較した場合、「消極的な丁寧さの方略」^{#6}の使用という点において、日本語や中国語には共通点が見られると述べている。特に「話し手の二つの『フェイス』^{#7}を脅かす『謝り』において両国語が防御的な傾向を示している」(1994, p.57)という結論を示している。又、鮫島(1998)は、台湾の日本語学習者が「謝罪」の発話行為でどのような表現を使用しているかを、定型表現と文末表現に焦点を当て、学習レベルの異なる学習者に対話形式の反応文を書かせるという形式の談話完成テストを行い、その傾向と特徴を観察している。しかし、前述の二つの研究についても、前者は「丁寧さのルール」に焦点を当てたものであり、後者は台湾の日本語学習者の日本語による表現研究である。「中国は独自の存在と見なされやすく、社会科学的手法をもちいた比較研究の対象とされる事は稀だった」と園田(2001, p.20)も述べている。

5. 問題の所在

字義的なことだけを考えれば中国人も謝っている。しかし、一方で日本人の目には姿として謝らない中国人の印象が非常に強いようだ。では、日中間においてなぜこのような認識の異なりが生じてしまったのだろうか。この認識の異なりは日中の謝罪の定型表現の多義性の有無に起因するのではないか。日本人はその精神性と「すみません」の持つ多義性から、重く深刻であると考えられる状況下でも、比較的安易に「すみません」を用いる。一方、中国語の代表的な謝罪の定型表現である「对不起」は日本語の「すみません」とは異なり、謝罪の意味のみで、それ以外の意味は持たない。そして、中国人は一概に謝罪の定型表現を使用しないとは言い切れないが、日本人がここで相手が謝るべきだと期待する場面で謝らないことが多いようだ。園田は、中国人は「行動を律する規則や考え方、その背景となる社会的な慣習や価値観など、多くの点で日本人とは異なっているため、日本人が予想するような反応が返ってこない」(2001, p.21)と述べているが、これが中国人は謝らないという印象を日本人に植え付けてしまう一因になっているのではないだろうか。「予想するような反応が返ってこない」ということは、言い

換えれば「期待通りにならない」ということであろう。太田は「期待についての内容は文化間で異なることがあるので、結果的に誤解やコミュニケーション摩擦を誘発することがある」（2000, p.192）としている。期待に反した対応を受けることによって起こる誤解やコミュニケーション摩擦は人々の印象に根強く残るであろう。その結果として前述のような中国人論が定着したまま修正されることなくここまでできてしまったのではないだろうか。そして、この中国人論は中国人の謝罪行為に対する偏ったステレオタイプを作り上げ、その結果、日中間に生じるさまざまな摩擦の原因になっているとも推測できる。

又、日中の謝罪のコミュニケーション方略の異なりも考慮する必要がある。日本人は定型表現を使用し、謝ってみせることを第一の方略として採用する傾向があり、一方、中国人は定型表現を使用しないという方略を用いる傾向が強いようである。これは、中国人が犯してしまったミスに対して自分がカバーできる範囲で責任を持つことを謝罪の第一義と認識しているからであるとも考えられる。例えば、陸は中国人の礼儀面での習慣は「重行動、軽言語（行動を重んじことばを軽んずる）」（2001, p.102）であると指摘している。これは謝罪行為においても共通するのではないだろうか。日本人はまず言葉で謝罪の意を表明することから関係修復を始めるのに対して、中国人は言葉による謝罪だけではなく、実際に行為を示して見せることで相手のより深い納得を得ようとする。日本人の場合、謝罪の言葉から謝罪行為が始まるのが重視され、反対に補償のみあって謝罪の言葉がない場合、いわゆる「心がこもっていない」と相手が見做し、その場が収束しないかもしれないという危険性がある。一方、補償の行為を重視する中国人は極めて現実的な国民であり、中国人にとって言葉のみの謝罪は謝らないことと同一視されうる傾向にあるのではないだろうか。このように考えた場合、新たに、無条件に謝る日本人に比べ、最後まで面子にこだわる中国人という像も浮かび上がってくる。つまり責任の取り方に着目した場合、日本人は相手に委ねるという形で無条件の謝罪をするが、中国人は自分の非を認めた時には、責任の取り方を自分で示すことで、決して無条件の謝罪ではない、面子を立てた上での謝罪を行っているのである。

中国人の「謝罪」が直接的発話行為を伴うかどうかという点で、日本人の典型的な謝罪行為とは異なる可能性は大いにある。しかし、中国人も謝罪行為を行う必要がある場合には、なんらかの形で面子を意識しつつ謝罪行為を遂行している。

しかし日本人側がこの中国人の方略を理解していなければ両者の間に摩擦が起こることは容易に想像できる。中国では謝ること自体が自分の利益もしくは不利益に直接結びつくという社会的背景がある²⁸。よって、中国文化においては本質的には謝らない側面があることも否めない事実であり、日本人がそれを認めるか認めないかということもポイントになってくる。

例えば、沖 (1993, p.39) は、「この小説、うまく行きませんでした」という文を例に挙げ、「この文には『謝罪』の意はどこにも探せないが、〈話し手が引き起こした・聞き手に対してはマイナスの・事態を・話し手自身が・描写する〉という、この文自体が『謝罪』の機能を持つのである」と説明している。この解釈は中国語にもあてはまるのではないだろうか。一般に、中国語では謝罪表現が使われることが少ないと言われるが、中国語においても、話し手が引き起こした聞き手に対してはマイナスの事態を話し手自身が描写する文が「謝罪」の機能を持つという言語的背景があるのだとしたら、定型表現が用いられないことがないまま、謝罪行為が収束するケースも存在する可能性がある。「文化によっては謝ることと責任を認めることが同義な場合もあり」(中道・土井, 1993, p.68)、「原行為をするに至った理由を考えなくてはいけない言語もある」(金田一, 1987, p.81)のであるから、中国語でも、定型表現が用いられていなくても、責任を認めたり、理由を説明したりした時点で謝罪行為が成立する談話もあるのではないだろうか。

中国語において、定型表現を用いないまま謝罪行為が収束している談話のパターンを見つけていくことにより、従来の中国人論にあるような、中国人は謝らないという偏ったステレオタイプに対する反論の余地も出てくるのではないかと思われる。

6. 今後の課題

以上により、今後、日中の謝罪表現研究を行うにあたり、以下の点に留意していく必要があると考える。

まずは、日本語と中国語の謝罪の定型表現の多義性を考慮に入れる。そして、定型表現を用いないまま謝罪行為が収束している談話のパターンを探し、その談話が成立すべき条件を明らかにする。さらに、中国人の面子意識とのかかわりの中での謝罪行為の実際を探ることである。

注

- (1) 日本と中国とでは面子観は微妙に異なる。末田 (1997, pp.19-20) の調査では、中国人学生は能力に関わる面子の意識が一樣に強い。一方、日本人学生は自己及び他者の面子を重視した行動を一樣にとるという事が明らかになっている。
- (2) 『日本国語大辞典』(1974)、『学研国語大辞典』(1981)、『大辞泉』(1995)、『広辞苑第五版』(1998) など
- (3) 『汉语大词典』(1988)、『現代汉语规范用法大词典』(1977)、『現代汉语八百词』(1999) など
- (4) 原文は「対人有愧。常用为表示抱歉的套语。」
- (5) 中田のように「謝罪」を「陳謝」と表現している研究者もいるが本稿では同義に扱う。
- (6) 強制を避けるための方略を意味する。曖昧な言い方をしたり、謝ったり、選択の自由を与えたり、相手の行動に対して干渉する事を避けたいという表示をする。この「消極的な丁寧さの方略」に対して、「積極的な丁寧さの方略」がある。「積極的な丁寧さの方略」とは、聞き手に好感を与え、価値観が共有されていると感じさせるものである。この方略は、社会的な連帯を結ぶ事を目的とする。(笹川, 1994, p.46)
- (7) 「フェイス」は Brown & Levinson (1987) の「face」と同義である。二つのフェイスとは相手から自分の領域を侵害されずに行動したいという欲求である「消極的なフェイス」と、個性を相手に認めてもらいたいという欲求である「積極的なフェイス」の事である。
- (8) 日中異文化コミュニケーション研究会 (2004. 4. 22、於立教大学) 議事録より。

参考文献

- (1) 池田理恵子 (1993) 「謝罪の対照研究—日米対照研究—face という視点からの一考察—」『日本語学 12』明治書院、pp.13-21
- (2) 太田浩司 (2000) 「グループ間コミュニケーションアプローチ」『異文化間コミュニケーション入門』西田ひろ子編、創元社
- (3) 沖裕子 (1993) 「方言談話にみる謝罪的感謝表現の選択」『日本語学 12-12』明治書院、pp.39-47
- (4) 金田一秀徳 (1987) 「お礼とお詫びのことば」『言語 第16巻』4月号、大修館書店、pp.75-83
- (5) 笹川洋子 (1994) 「異文化間に見られる『丁寧さのルール』比較」『異文化間教育 8』異文化間教育学会、pp.44-58
- (6) 鮫島重喜 (1998) 「コミュニケーションタスクにおける日本語学習者の定型表現・文末表現の習得過程—中国語話者の『依頼』『断り』『謝罪』の場合—」『日本語教育 98号』日本語教育学会、pp.73-84
- (7) 末田清子 (1993) 「中国人が持つ面子の概念と日本人とのコミュニケーション」『年報社会学論集 第6号』関東社会学会、pp.191-202
- (8) 末田清子 (1997) 「中国人学生の日本人学生の『面子』の概念及びコミュニケーション・ストラテジーに関する比較研究」『北星論集 第34号』北星学園大学、pp.1-24

- (9) 園田茂人 (2001) 「中国人の行動を理解する」 「面子」 『中国人の心理と行動』 日本放送出版協会
- (10) 中田智子 (1989) 「発話行為としての陳謝と感謝—日英比較—」 『日本語教育 68 号』 日本語教育学会、pp.191-203
- (11) 中道真木男・土井真美 (1993) 「日本語教育における謝罪の扱い」 『日本語学 12-12』 明治書院、pp.66-74
- (12) 平賀正子 (1996) 「ことばと行為」 宍戸通庸他 『表現と理解のことば学』 ミネルヴァ書房
- (13) 三宅和子 (1994) 「『詫び』以外で使われる詫び表現—その多様化の実態とウチ・ソト・ヨソの関係』 『日本語教育 82 号』 日本語教育学会、pp.134-146
- (14) 山口和代 (2001) 国際交流基金日本語国際センター 「留学生の日本語表現と文化の影響」 『日本語教育論集 世界の日本語教育 第 11 号』、pp.225-241
- (15) 山梨正明 (1986) 「発話行為の基本的側面」 『発話行為』 新英文法選書 12、大修館書店
- (16) 曹美蘭 (2002) 「中国における日本語教育と異文化教育統合の研究」 上智大学大学院文学研究科教育学博士前期課程修士論文、p.44
- (17) 晨光 (1995) 「『報』と『誠』のコミュニケーション」 『異文化コミュニケーション研究 第 8 号』 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所、pp.169-184
- (18) 陸慶和 (2001) 「ことば・表現習慣・真意伝達」 「呼称・わびる文化・消費観念」 『こんな中国人、こんな日本人』 関西学院大学出版会
- (19) Brown, P. & S. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (20) Goffman, E. (1971) *Relations in Public: Microstudies of the Public Order*. New York: Basic Books.
- (21) Ide, Risako (1998) 'Sorry for your kindness': Japanese interactional ritual in public discourse. *Journal of Pragmatics*, 29: pp.509-529.
- (22) Olshtain, E. (1983) Sociocultural competence and language transfer: The case of apology. In S. Gass and L. Selinker (Eds.) *Language transfer in language learning* (pp.232-249). Rowley, Mass: Newbury House.